

# 高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報  
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一  
京都市中京区木屋町通三条上ル  
電話 (〇七五) 二二二二・一八一八  
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両面で健全な国体を支える国家」を求めます。

## 《中庄浜と今津浜の境 ヴィデテさん》

一つの門(ゲート)の中に平屋4邸の「松林邸」の南の浜沿いに6月開店したヴィデテさんを近隣の方の紹介で訪問しました。店主は南アフリカ生まれで欧州各地や中近東でシェフを経験、奥様は日本人。ヴィデテとはフランス語で「サマーライブ」という意味。最高に美しいロケーションでお料理を楽しんでもらいたい、という想いから名づけられました。滋賀県高島のびわ湖の湖岸から他にはない絶景を一望しながら、世界のテイストを織り交ぜたコンテンポラリーフレンチキュイジーヌと、そのお料理にマッチする味わい深いワインや様々なドリンクをレイクビューのインドア席とテラス席の26席でご堪能いただけます。

☎0740-20-6954 www.videete.com

## 《大原流声明雑話①》

實光院住職 天納玄雄

大原流声明の系譜には、現代では天台宗のほかに浄土宗や真宗本願寺派などが連なっている。声明の源流はインド仏教である。釈尊の時代に謡われていた音曲が、時代とともに儀式として整えられ、本邦へ伝わり、約千二百年にわたって伝承されてきたのだ。節回しや儀礼の所作は時代とともに変化してきたとはいえ、その本質は変わっていない。声明とは、仏への供養の讃歌であり、仏の説法そのものであり、人々への説法でもあるのだ。時代に応じた寺院や僧侶のあり方が論じられ、その革新を求める声が大きく、昨今である。しかし、古伝をそのまま次世代に伝えることと、時代に応じた本質を崩さない法要儀礼の実践の両方が大事なのではないだろうか。  
※さきさき創業満50周年記念感謝会の幕開けに天台声明が唱えられました。

## 《迷い道》

常楽臺住職 今小路覚真

渡辺真知子の歌で「迷い道」の歌詞の一節に「ひとつ曲り角 ひとつ間違えて 迷い道くねくね」とあります。郊外の団地に友人を訪ねて、同じような家並みにとまどい、たどり着くのに苦労した経験が最近にありました。わたしの車のカーナビが時代遅れで教えられた番地を入れても、示された画面は一面の空き地。全く役に立ちませんでした。仕方なくわたしが探したのはその団地の案内板でした。そして案内板の示された道すじをたどって目的地にたどり着きました。この案内板で頼りにしたのは、目的地の番地は当然のことですが、さらに大切なことは『現在地』という三文字でした。道に迷う、迷子になる、というのは誰しも目的の地ははっきりしているのです。ただ今居る場所が判らなくなっていることなのです。【脚下照顧】

## 《ワインについて》

イタシヨク 福村 直

ワインは今でこそ気軽に飲める身近なものになりましたが、昭和にはまだまだ一般的でなく、ぶどう酒と呼ばれている時代もありました。またワインが浸透していない当時はこの名称を使った商品やかぼちゃワインなんてアニメもありました。ワインとはブドウを原料に造られた醸造酒であることが前提となり、その他の原料のお酒はワインを名乗ることは出来ません。原料には巨峰の様な黒ブドウ、そしてマスカットを代表する白ブドウがあります。これを用途に合わせて白、赤、またアルコール発酵時に発生する二酸化炭素を閉じ込めることでスパークリングワインを造ります。馴染みの無かった頃か、らの方は、泡の出るワイン全てをシャンパンと呼びますが、これは間違いとなります。フランスシャンパン地方の決められた製法のみで造られたものをシャンパンと呼ぶので、気を付けて頂ければと思います。

## 季節の家庭料理

田村真紀

《十一月 サツマイモとクルミのガレット》  
《作り方四人分》  
サツマイモ三百グラム・クルミ十粒・バター三十グラム・砂糖大匙二

サツマイモは皮をきれいに洗い、スライサーで薄切りにし細い千切りにする。耐熱皿に移しラップをかけ、レンジで二分ほど加熱する。くるみは粗めに刻み、サツマイモに混ぜ合わせる。フライパンにバター半量を溶かし、砂糖の半分を全体に散らしサツマイモを丸く広げる。弱火で弱めの中火で約一〇分、ヘラで押さえながら、焦がさないように丸く成形しつつじつじつと焼く。底の面がカリッと固まったら、サツマイモの上に残りのバターをカットして全体に散らし、残りの砂糖も全体にまぶし裏返す。裏面も弱火で約一〇分焼く。

## つれづれの記

山崎辰巳

### 《白秋の時を迎えて》

古代中国の思想では人生を四季にたとえてそれぞれ異なる色で表し、玄冬・青春・朱夏・白秋と呼び、私たちの日常生活の折々に登場し、馴染み深い言葉になっています。意外にも人生は春からでなく冬から始まるという。幼少期は先の見えない暗闇の中にあり、それに相当する季節は冬。表す色は混沌の色、玄が当てられています。玄冬を過ぎると地中の種子が芽吹き、野山が青々と茂る春、イコル青春となり、この時期を過ごす青年たちが人生を謳歌・躍動し、やがて中年になると、夏という人生の盛りを迎え、燃える太陽のイメージから色は朱があらわれました。そして「壮・老年期」を迎えると人生は秋。色は白、白秋を迎えます。日本の今は白秋の時代。原点の白紙に還るか、さらに熟成していくか？熟慮の時です。